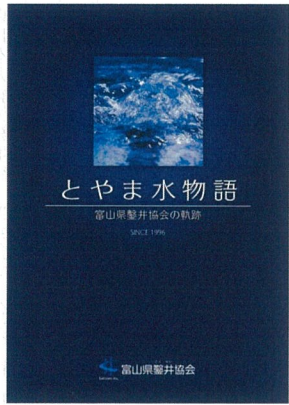


記念誌 とやま水物語 創刊



記念誌 とやま水物語

富山県鑿井協会は、広く市民の方に「井戸・地下水」の大切さを理解していただくことを目的に2001年より1月10日(いど)を『井戸の日』を制定しました。以来、全国へと発信を続け2006年より全国さく井協会が主体となり、11月10日(い〜いいど)に改め毎年、全国各地で「い〜いいどの日記念フォーラム」を開催しています。2012年は富山県、富山国際会議場で開催いたしました。富山から発信した『井戸の日』が全国展開し再び富山に戻って参りました。これを期に、その集大成として記念誌『とやま水物語』を制作いたしました。

「い〜いいどの日記念フォーラム2012 in 北陸」開催報告を中心に2001年の井戸の日制定から今日までの「井戸の日のあゆみ」と「富山県鑿井協会のあゆみ」の2部構成となっております。

「井戸の日のあゆみ」では、井戸の日の趣旨や毎年の記念事業について紹介しており、年を重ねるほど盛大になっている様子をご覧いただける内容となっております。

「富山県鑿井協会のあゆみ」では、当協会の理念や1996年に設立してから今日までの主な事業について紹介しております。

『とやま水物語』の創刊を機に、当協会では今後も様々な活動を通して、井戸の日の普及、水環境の向上に努めてまいります。

富山県鑿井協会 秋の懇親会



秋の懇親会で挨拶をする内山会長

富山県鑿井協会平成二十五年秋の懇親会が平成二十五年十一月二十六日(木)富山第一ホテルにて開催しました。

初めに内山会長の挨拶があり、続いて当協会顧問宮本光明県議員が挨拶され、「北陸新幹線の開業まで一年半となり、建設業をはじめに富山県全体が元気になる。」と述べられた。土合副会長の乾杯と続き、歓談に入った。出席者には記念誌『とやま水物語』を配布し、発刊の経緯の説明や内容の紹介がありました。

また、顧問アレマー玉井氏(富山県観光プラゼンター)によるマジックショーでは各テーブルでのマジックも披露していただき、大変盛り上がりました。

今回は会員・賛助会員等総勢二十四名の参加があり、互いの親睦を深めました。

Eco フレンド

Vol. 29

【発行】平成26年2月
富山県鑿井協会
〒930-0892 富山市新庄町一丁目十九番二号
☎(076)444-4257
Fax (076)444-4287
http://www.atw.ne.jp/~tomisaku/
E-mail: tomisaku@atw.ne.jp

秋の懇親会開催前には、富山第一ホテル春日の間において、富山県知事政策局 西海国浩氏による講演会「総合計画について」が開催されました。富山県が策定した新しい総合計画「新・元気とやま創造計画」についてご講演いただきました。

政策の柱である「活力とやま」「未来とやま」「安心とやま」の各分野には計六十の基本政策があり、産業や観光の発展、環境の保全や子育て支援、医療や福祉の充実等、十年後の目指すべき将来像「元氣な富山県」の実現に向けた様々な取組みをご紹介いただきました。おわりに、富山県は全国トップクラスの住みやすい県であるという統計を紹介され、改めて恵まれた環境の中で生活していることを実感しました。

講演会 ― 県庁ととと談義 ―



西海氏ご講演の様子

いい井戸の日 2013 in 中部

2013年11月7日(木)愛知県で開催されました。

2012年11月に富山県で開催された、全国さく井協会主催の『いい井戸の日』が、今年度は2013年11月7日(木)、愛知県名古屋市の名鉄ニューグランドホテルにて開催されました。

記念講演会は岐阜大学大谷具幸准教授、中部大学ジョン・ギヤスライト教授の2講演があり、常設展示コーナーや井戸の相談コーナー、全国さく井協会臨時総会・懇親会も合わせて開催され、全国さく井協会会員や関係企業や団体の方々120名以上が参加し、会場は大変な賑わいでした。



記念講演会の様子



「井戸の日を振り返って 2013」

内山 鑿泉工業株式会社 内山 祐治

2012年11月富山市国際会議場を会場に『い〜い井戸の日記念フォーラム 2012 北陸』が開催されました。このイベントはいまでは毎年(社)全国さく井協会の9支部が持ち回りで開催しております。

この井戸の日記念イベントが富山から発信し、12年後に規模も開催日も新装して昨年、再度富山に戻ってきました。この12年間の「井戸の日」事業の記録を冊子としてまとめ、また当協会の歩みを振り返ってみようと思われながら『とやま水物語...富山県さく井協会の軌跡』を発刊いたしました。

富山県鑿井協会が設立した当初、時節がバブル崩壊の不況の波が地方にまで押し寄せていました。窮地の底から自分たちが出来ることから仕事を作ろうと動き出したのが「井戸管理マニュアル」の普及でした。県内の土木事務所を廻って井戸の点検・管理の必要性を訴えました。さく井業を営む若い経営者、後継者が無我夢中で走り回っておりました。その甲斐あって経年井戸の調査、井戸再生工事等の改修工事が業界に巡ってくるようになりました。窮すれば通ずるとはこのことかなと思われました。

その後も引き続き2000年ミレニアムに「1月10日は井戸の日(当初の記念日)」と制定し、全国に波及させようと念じました。持続可能な資源としての地下水の貴重性、重要性をまた地下水の有効利用と共に地下水環境の保全をアピールして2001年メディア広告を、

2002年から2005年まで富山県鑿井協会単独で「井戸の日記念フォーラム」を富山市で開催しました。それからは「11月10日はい〜い井戸の日(記念日の変更)」として全国さく井協会北陸支部が主催となって富山市、金沢市で2回、2009年からは(社)全国さく井協会臨時総会と同日開催となって近畿支部より開催を持ち回っております。

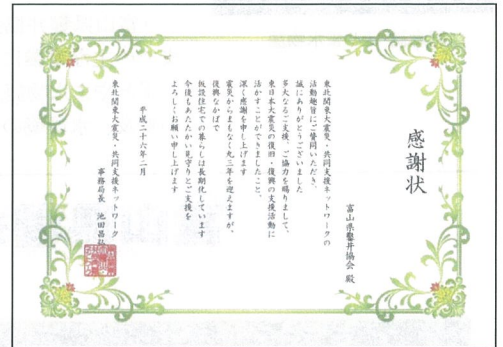
(一社)全国さく井協会となってからもこの事業が重要な公益事業として運営され、会員間の大交流の機会となり、新しいさく井技術の紹介・提案等また、地下水の有効利用や保全に取組む他団体との意見交換も好いと思われ。今年度(2013)は中部支部名古屋の会場で開催されました。益々業界の活性化に繋がるよう期待しております。

東日本大震災・協同支援ネットワークより 感謝状が授与されました

東日本大震災発生後、当協会では会員、賛助会員へ募金を募り、平成二十三年八月、協会員5名が宮城県仙台市の被災地へ訪問、現地にて支援に当たっている特定非営利法人「全国コミュニケーションライフサポートセンター」へ支援物資を届け、被災状況を視察いたしました。

当時は、家や車が流され瓦礫の山が散乱しており、言葉にならないくらい状況でしたが、東北の方とコミュニケーションを図った事で支えたいと思いが強くなり、又、被災者の方にも少し元気を与えることが出来るのではないかと思われ。

この度の感謝状の授与を機に、今後も当協会として何が出来るかを考え、微力ながらも支援して参りたいと思われ。



スクリーンメーカー・パイプメーカー・ポンプメーカーのコラボレーション! 「防災井戸パッケージ」の御紹介

株式会社ナガオカ 国内営業部 東京営業課 田中誠一郎

近年では東日本大震災(2011)、中越沖地震(2007)が発生、4つのプレートに乗る日本列島は世界でも有数の地震多発地帯です。そこで防災対策に適した井戸パッケージを紹介させていただきます。

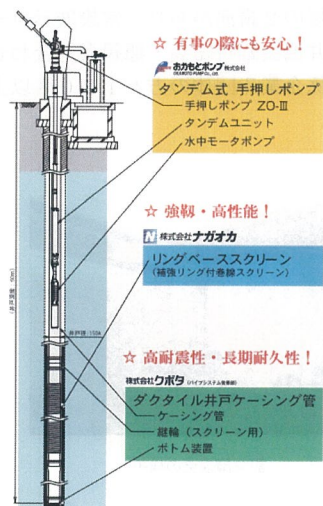
当社では、強靱かつ高開口率を同時に実現する「リングベーススクリーン」に、株式会社クボタが製造する耐震性・耐食性に優れた「ダクタイル井戸ケーシング管」、おかもとポンプ株式会社が製造する手押しポンプと電動ポンプを同時に1本の揚水管に設置可能な「タンデム式手押しポンプ」と、3社によるコラボレーションにより防災井戸の決定版ともいえるパッケージを提案しております。

リングベーススクリーンは、高開口率の水平連続Vスロットスクリーンを基本としながら、独自の補強構造によりパイプベーススクリーン同等以上の強度を実現しております。

ダクタイル井戸ケーシング管は、屈曲可能な継手構造により振動に追従可能、耐食性に優れたダクタイル鋳鉄の内外面に水道配水管と同じ樹脂塗装を施すことで長期耐久性を実現、ワンタッチで接合できる離脱防止継手により現場での溶接作業が不要となり、溶接継手とケーシング時間は半分以下となっております。

タンデム式手押しポンプは、通常は電動ポンプとして運転、停電時には手押しポンプ(従来の手押しポンプの揚程(一般には約7m)を遙かに凌ぐ50mの高揚程対応)として生活用水確保が可能、深井戸でも運用可能な2ウェイシステムとなっております。

全国的に見るとまだまだ整っていない地域も多い防災インフラ事業への提案として、この防災井戸パッケージが会員様のお役に立てることを願い、各方面にPRを進めていきますので、御愛顧の程、宜しくお願いいたします。



地熱ヒートパイプ融雪システムについて

(株)興和 北陸支店
支店長 笠原 史夫

いつもお世話になっております。

今回、貴協会より寄稿のご依頼がありましたので、当社が十数年取り組んでまいりました『地熱ヒートパイプ融雪システム』について、述べさせていただきます。

このシステムは、帯水層まで井戸を掘削し、挿入したヒートパイプにより、地熱エネルギーを取り出して融雪を行います。地温と路温の温度差で自然に放熱するので、大雪で積雪状態になっても路面が出るまで融雪を続けます。

ここまでは、ご存じの方もおられるかと思いますが、実際にどれくらいの熱量が必要か?

ということになると、よくわからないと思われ。そこで、弊社の本社社屋における実験データを使い、数値的なものを言うと、

『気象条件(気温-0.4°C、風速4.6m/s、時間降雪深1.5cm/h)で123.4w/m²の設計必要熱量のところ、降雪時の測定で、130w/m²~最大180w/m²の放熱量となりました。また、冬期間の地温は15.5°Cを保ち、春まで必要熱量を上回る放熱量を得ることが出来ました。』となります。

尚更よくわからないという方もおられるかもしれませんが、簡単に言えば、地下水のある場所では、冬季のシーズン中、融雪を行うための必要熱量以上の熱量が十分得られるということです。

富山県内は地下水が豊富な場所が多いため、この地熱ヒートパイプ融雪システムは効率よく機能すると思われ。

また、弊社の本社玄関前には、実験データを常時表示しておりますので、行く機会に、見て頂ければ幸いです。

今後とも宜しくお願い致します。



地熱ヒートパイプ融雪システム実験施設(興和本社玄関前)